

私は一九五四（昭和二十九）年に岡山大学を卒業して、ほぼ四年間小学校に勤務していた。高校時代から詩を書き、大学では詩の雑誌「火片^{かへん}」を発行していたので、職場でも、ただ授業だけに終止することを好まなかった。小学校で詩を書かせ、子供達の文集を作ったりしていたが、はからずも一九五八（昭和三十三年）九月から、大原美術館に近い倉敷市の、岡山県立倉敷青陵高等学校（通称倉敷青陵）に勤務することになった。文芸部の顧問もして、ここでも生徒に現代詩の指導をした。

児童詩の多くは身辺詩で、出来不出来も偶発的、優れた児童詩の作者がそのまま大人の詩人に成長するものでもないから、或いは高校生なら、長じて大人の詩に通じはしないか、という期待もあった。（現在はなかなかそうはいかない。特に進学校では、現代詩は受験にさして必要ないと考えられているし、書く余裕もない。）

吉田さんは、たまたま一九六〇（昭和三十五年）年に、困難な入試を経て私のいる倉敷青陵に入学して来たと思う。私は図書館の運営係をし、文芸部の顧問でもあった。

彼女も二年生の時に文芸部について、その詩が飛び抜けて異彩を放っているのを知った。文芸部で、岡山の詩人永瀬清子氏を招いて詩の話をしてもらうこともあったのこともかもしれない。私が彼女の才に気づくと、彼女はノートいっぱい書いた詩を見せた。詩は心を読み取らねばならないから、責任を持って遇せねばならない。いくつものいい詩があった。高校生だから資金の心配もあるので、「一〇万円ほど用意すればどうにか簡単な詩集を出せるから、帰って親に相談してごらん」と言うと、すぐ翌日「大丈夫」と言ったので、私は保健室に逃れて、静かに、カーテンで仕切られたベッドにこもって、何日もかけてセレクトしたのを思い出している。

詩集は『花を持つ私』というもので、勿論彼女の処女詩集、岡山の三隆^{みかた}印刷所（当時はまだ四谷印刷所と言ったか、私の係りつけの活版印刷所であった。）で作ってもらった。この詩集は、今ではすっかり年月を経て、色

あせ、くすぶったようになっていたが、入手し難い貴重な一冊になっていた。高校生の出版だし、彼女はあまり社交上手でもないが、友情にも恵まれて思いのほか売れたらしい。自費出版だが、発行は「岡山県立倉敷青陵高等学校文芸部」で私の拙い序文を入れている。

彼女は自己執着が強く、詩は少々表現過多に思われた。平素の学生生活にしても、友人達の中でも自己の存在性が気になる模様で、ちよつと声をかけるのにも気づかわれた。現代国語のテストにしても「○×」方式が導入されていたが、「字数制限○○○字」と指定された解答にしても、彼女の解答はおおむね長文で、用紙いっぱいいる文字で詰まっていた。なぜだろうかと疑問に思い、その理由を推測はしたが、本人に尋ねるのもどうかと躊躇された。

この度、これを書くのに彼女に履歴を略記してもらった。その一部を述べておくが、まこと彼女にとつて一切は不条理な話である。しかし、彼女の詩心の芽生えも早い詩集の刊行もこの境遇に依ることかも知れない。彼女ははこの個人的境遇を源泉とし、努力してそれを現代詩の

次元に高めたと言えるだろう。

彼女は岡山県備前市（市内に竹久夢二の生家や閑谷学校がある）で大取千治の三女として生まれている。女三人姉妹だったので、母方の叔母、倉敷の吉田家の養女になっている。一九四九（昭和二十四）年のことだ。小・中学校を経て、この倉敷青陵に入学している。養父母には大事にされたに違いないが、賢くもあればその期待も大きく、不相応な要望を負ってもらったろう。彼女の後に間もなく出来た弟への切実な詩はけなげだ。高校卒業後は女子大生となり、結婚して西岡姓となるが、やがて夫婦揃って倉敷に来て、以後吉田姓である。

六歳で養女になり、小学校・中学校と人生の最も多感な時期を成長して来るのには様々な葛藤があったろう。信・不信・愛・夢・失望……。画を能くし、文にも才があれば、左右に揺れる思いを一つに絞りに絞りに、イメージを統一しながら生涯詩を書き続ける努力と継続力を今改めて称賛したい。

彼女の境遇を知ってもいるから一五頁の「まめむき」、一〇八頁の「そら豆」などの描写には兄弟・姉妹のこと

を思うし、一一二頁の「ほんとうに」などの夢には共感してしまふ。一二九頁の「命の尊厳」には彼女が養母の介護を通して到達した仏性に心うたれるし、一三三頁の「この広い海のなかから」には、社会的視野を、一一一頁の「うしなう」などには彼女が到達した現代詩の姿を感じている。

平成二十二年二月、まだ寒い立春の頃に

吉田博子論

三方 克

おれたち人間て何物なんだ？
どこからやってきて
どこへ行くんだ？

哲学の原理みたいなこの質問をしたのは、鴨長明であり、シャルル・ボードレールであり、ポール・ゴーギャンであることは、よく知られている。この質問の「原器」が古代アフリカにあるのか、あるいは古代の日本の古代のユダヤかギリシヤ、古代インドにあるのか追究するのが、本稿の目的ではないので、この程度にしておくが、前掲の質問にまっとうから立ち向かったのが、先日（二〇一〇年一月二十七日）九十一歳で亡くなったジェローム・デービッド・サリンジャーだった。

サリンジャーを青春小説やピカレスクの類に組入れるのは、とんでもない誤解であり、『ライ麦畑でつかま

えて』のライ麦畑とは、子どもたちがかけ回る場所であり、天動説の天の周辺のような崖っぷちで、子どもが落ちないように見張るのが、原作者と瓜二つの主人公・ホールデン・コールフィールド君である。

彼は心からやさしい女を除く紳士淑女やその予備軍の学生たちを「馬鹿野郎」とか「インチキ野郎」とのっつけているが、常識的に見てそれほど悪党はいない。

だがサリンジャーから見ると、前掲の質問（以下、疑義という）を考えようとしぬい連中こそ、イカサマ師やインチキ野郎にほかならない。特に食わせ者といったら、尊敬すべき「指導学生」でありながら変態性欲の話ばかりしているカール・ルース（今は出世）や、物分かりが良く、さりげなく高等教育の必要を説き、夜中になると「美男子クン」のホールデンの所にしのであるホモのアントリーニ先生、こんな手合いがサリンジャーをして、ゲロを吐くのを通り越させ、気を遠くさせた上、二度と逢いたくない存在にする。

サリンジャーは疑義を考え、結局、性の結論を考えた。ピカレスクの悪罵や中傷はアナキズム文学や

プロレタリア文学へ向かう発展途上文学というべきだが、性は、感性的認識と理性的認識の認識論を除いた不思議な性そのものであり、ホールデンの妹のフィービーが兄をしたい、近親愛の様相を呈した時、兄はじゃけんに妹をふり払い、ライ麦畑の中へ突き戻す。

訳者の野崎さんは、ピカレスクの様相を重視し、『坊っちゃん』の漱石を例示しているが、性の暴力性を敷衍する戦争をとらえ、サリンジャー自身、ノルマンジー上陸作戦に加わっている所を見ると、漱石に鷗外を加えるのが妥当であり、このピカレスクと性の流れは、わが国では芥川文学に行き着く。

ピカレスクと性の流れは荷風と谷崎文学、啄木、光太郎、朔太郎に伏流し、金子光晴文学と中野重治の詩に行き着く。

ことにシャルル・ボードレーと金子光晴のピカレスクと性のライ麦畑（ライ『横たわる↓死』のエロス、諷刺とユーモアのフィールド）には、心のひだを分ける山頭火と風天のハイク文学が存在し、これから本論をかく吉田博子の心をひだのように分けいる詩法もまた、ピカ

ように、一九四三年、岡山県備前市に大取千治・文子夫妻の三女として生まれた大取博子は、一九四九年、六歳の時、倉敷市の吉田一美・栄夫妻の養女となった。

だから私は、高田千尋の主筆誌「黄薔薇」によって、博子の詩にめぐりあえたのである。

実は私の父も飯野家の十三人兄弟の最も学校の成績の良い頑丈な働き手として、藩校の講師で貧乏武士の鈴木家の養子にきたのである。私は畳のへりを踏んだ罰として、祖母から長いきせるで脚をたゝかれた。理由を告げない祖母に私はむかつ腹を立て、白い壁に「ババアノバカ」という字をまっ黒になるまで書き殴った。

折悪しくその日は担任教師の家庭訪問だった。父は壁土をねって塗り始めた所に、担任がやってきた。「どうかなさったんですか？」「壁がくずれましてね……」

国民学校へ上がる前で、私が知ってるのは、ふつうの父親という印象だけだった。

叱られると思って観念していたのに、ニコニコしている父に抱かれて、不思議な思いをしたのを覚えている。

しかし、博子の姓が変わったのは六歳であり、もう物

レスクをふまえているといい。サリンジャーのように性の不思議は、心のひだに分ける詩法から視野にとらえられている。

私は『詩の学校』で出藍の誉れの生徒たち——葵生川玲、柴田三吉、鈴木文子、清岳こう——らを教えたとき、こう語ったことがある。

もしも私たちが健康で容貌にもすぐれ、金持の家に生まれ育ち、学校は優等生で社会に出ても成功したら、すぐれた詩がかかるだろうか。山岳部員の愉しみは岩場への挑戦にあるが、凹凸のない鏡のような岩場を登るのは至難のわざだろう。その点、おれたちは詩をかくのに向いている。おれは病氣と貧乏にとりつかれ、企業から偽手紙事件までデッチ上げられ、尾行、監視、盗聴、盗撮に遭っている。これでは詩をかくというのが無理だ。

ちなみにJ・D・サリンジャーの父は、ユダヤ人のハム輸入業者であり、母はスコッチ・アイリッシュで、お金は潤沢にあっても、目に見えたり見えなかつたりする被差別状況の中に常におかれていた。

大鹿保和の養子縁組から大詩人、金子光晴が生まれた

心はついていただろう。

『ライ麦畑でつかまえて』のホールデン・コールフィールドが妹のフィービーを愛したように、博子は弟を愛する詩をのこしている。

博子は愛情に飢えた心のひだをくり広げる詩から出発する。対象は自らを抱擁してくれる存在であり、時にそれは「母のように大きな翼のワシ」であつたり、逆に自らが抱擁するマヨネーズの油と卵に分裂した抽象体であつたりする。

また孤独感の心のひだへの刻まれようは単純ではなく、花屋でバラを買い、「学校の花瓶にさすと／友は くるりと取り囲みざわめいては口々に／甘い優しい言葉を私の耳もとに寄せる／まあ いいにおいねえ、」（花を持つ私）、「まめむき」では「一個の家庭のよう」な豆を「ようしやなく私の節くれだつた指」でふり落とす。「豆むきだから当然なのに、そうは思えない。」「疲れたでしょう」と／母に言いたかつた／でも私とその言葉を言おうとすると／私の口は それに反対のことをしゃべる」ピカレスク風のホールデンの悪口をたしなめるフィービー

と異なるのは、自我の世界なのだから、始末が悪い。

弁証法の正反合の原則から見ると、ひねくれへの反対は正であり、弟や生母や生まれ故郷が美しく描かれ、象や仏教のイメージは、素直さの象徴かもしれない。

「えんじ色の小菊」には、「私の前にいけられた小菊を見ていると／ふつくらしていつも優しい乳が／咲いているのかと思う」とナルシス的なエロスをうたい、次のような不思議な幸福感をつづる。

「かぎらない私の中の愛を流せるだけ流しだしてみたら／とてもかわいくて小さなすなおなだけの／真の私の心が残る」

疑義の「おれたち人間て何物なんだ？」と問われる時、流せるだけ流してしまふ愛と、かわいくて小さく素直なだけの真の「私」の心と、どっちが吉田博子なのか、いつたい吉田博子とは何物なのか考えてみよう。

つまり流してしまえる愛とは、いじめにくる者に対しては、時にヒネクレ、ピカレスクに転化するフアクターになり得て、「真の私の心」を防衛し、強固な精神にきたえ直す。

「ゆめ」の象や「すすき」の老婆の姿は、きたえられる自己世界の発展中の自我世界ということが出来る。

又「思う姿勢のまんま」では、「ひとつもつらくなんかないもん」と強がってみせるが、博子詩の不思議は、雨の日など「私には 空にすんでいるもの達の／なにかしら腹をわたた かくしごとなしのうちあけ話のように思われるのです」という疑義の「どこへ行くんだ？」の解答が、コルフールドが大切に詩のように、次のように結ばれる。

「その話ごえのくすぐったさは
がまんできないくらいです」

感性の感、理性の理を取り除き、認識などを無視した性の抽象衝動のエロスは、博子詩を泥だんごみたいに輝かすのだ。

「わたしを貴くもの」の弟への近親愛は、ホールデンを追うフィービーの禁断の愛に似て、現実となったら悲劇になりかねないが、日本の古代の部落では、そんなことは当たり前であり、念仏講のフリーセックスなどは何でもなかった。現代ほど自由が縛りつけられた不自由な時

代は、歴史的にも稀な時代といっても過言ではない。

正反合の合の時代に入ると、博子詩はJ・D・サリンジャーの認識と一致する「自分の翅でしんから鳴くのは」をかく。

「良い子になろうとして／なんと多くの自らの言葉を隠すだろう／誰にも見せぬ顔を／胸の内に一枚ずつ埋めるだろう／大きくなってゆく子供は／良い子と言われる為に 道化師になる」

朝に道をきけば 夕に死すとも可なり。

「ほんとうに」はそんな死によって生を語る詩である。動物図鑑にもつてない虫への愛着。弱者や娘への愛のうた。

おれたち人間て何物なんだ？ この詩集を読めば、やさしく教えてくれる自我世界がある。

「しんの優しさ」を共に生きる人

吉田博子詩集『いのち』 栗解説文・再収録

鈴木比佐雄

1

私たちは自らの命や地上の生きものたちを粗末にしな
いで、その命を子や孫の世代に引き継ぐことができるだ
ろうか。命を信じ命を温めながら育てることが可能だろ
うか。そのためにはただ自分たち人間という種族を生み
育てることだけでなく、人間以外の命そのものへの畏敬
の念が根底になくしてはならないだろう。そこから人間を
相対化し多様な命とともに人間が共生できるかどうか、
いま試されているのだろう。吉田博子さんの詩は、そん
な命の根源を見詰めている。平明な詩行の奥に運命に翻
弄されながら、抽象的な命ではなく、個別の「いのち」
を見詰めている。そしてその「いのち」の在りかを探し
求める。故郷とは「いのち」が引き継がれる場所ではな
かったか。自分は果たして「いのち」を誰かに引き継ぐ
ことができるのか。そんな揺れ動く一人の人間の内面を

抱えた切実な問いが感じられる。例えば第九詩集『咲か
せたい』の中に詩「ふるさと」がある。この詩には吉田
さんが生涯こだわり続けているテーマが記されている。

ふるさと

母は
おいしい涌き水の側
母は
ふつくらとした大きな山懐
母は
ほほえみの優しさ
母はふるさとの山の匂い
海の薫りたつ
魚売りの母
つかい谷で鎌をふるう
玉葱やじゃがいもを植え
たくさんの子を育て
母は

井戸ですいかやトマトを冷やし

わたしに食べさせた

父も魚売り

わたしの手を握り

大きゅうなつたなあ、と笑った

わたしに向かう時

父も母も笑顔だった

わたしの心の奥に大切にしまわれている宝物

父と母の笑顔

自然からのいただき物

おいしい水とおいしい食物

父も母も貧しかった

だがわたしは苦しい時も

父母の笑顔を思いうかべるだけで

のりこえ生きてきた

今は父も母もいない

わたしは子供達にとびきりの笑顔で

接してきただろうか

過ぎてきた時は

思い出の中に

父母の優しい笑顔を

一層すがすがしく焼き付ける

第八詩集『立つ』のあとがきによると、吉田さんは
人兄弟の三番目の子供であったが、六歳の時に生母の妹
夫婦の養女となった。吉田さんがどのような思いでそ
のような運命を引き受けたのかは語ってはいない。しかし
自分ではどうしようもできないところで、二組の父母
を持つことになった複雑な思いは生涯続いているのだろ
う。この詩に出てくる父母は産みの父母のことだ。この
詩が感動的なのは、「わたしは苦しい時も／父母の笑顔
を思いうかべるだけで／のりこえ生きてきた」と語って
いることだ。そして「わたしは子供達にとびきりの笑顔
で／接してきただろうか」と自問していく。産みの親が
養女に出してしまった娘に対して我が子のように「優し
い笑顔」で接してくれたことは、自分のことを忘れずに
愛し続けているのだということを吉田さんが直観したか
らだろう。吉田さんはこの瞬間に自分の運命を素直に受

け入れて、産みの父母と育ての父母の両方に感謝したに違いない。

実はこの詩を読むたびに、私は染織家の志村ふくみさんの随筆集『一色一生』の「母との出会い・織機との出会い」という文章を想起してしまう。志村さんは二歳の時に叔父夫婦の養女になった。十六歳の時に偶然に自分の赤ん坊の頃の写真を見ると裏には小野ふくみと書いてあった。伯父の一家が小野姓であることを思い出し、伯父夫婦の四人の子供の三子と四子の間が離れていてそこに自分を入れるとぴったりすることに気づいたという。それから伯父夫婦宅を訪ねたりしたが、打ち明けることもできずに悩み続け、二年後に従姉に「私の姉ではないか」と思い切って訊ねた。すると姉は烈しく否定して帰ってしまったという。姉からその話を聞いた生母は、志村さん呼び寄せて家族全員の前で泣きながら本当のことを話し、「かんにんしてや」と告げたという。その時の滞在中に母が使用していた織機^{はた}で藍の糸を織るのを見せられたことが、後の志村さんの運命を大きく変えていったのだ。吉田さんの場合は六歳であったので秘密に

されてはいなかったと思われるが、六歳の幼児に親を選ぶことなど不可能であったろうし、二組の父母がいる複雑な思いは同じであったろう。それゆえ吉田さんは「父母の笑顔」の中にいつも自分の幸せを願っている優しさを信じながらも、自分とは何者なのかと問い続けてきたのだろう。

吉田さんにとつての人間への信頼と感謝の思いは、次に引用する詩「しんの」を読めばよく伝わってくる。

しんの

その人間のしんの優しさを
わかる人は
尊いことだ
その人のかくれた優しさを
みつけられる人は
人の心の尊さが
わかる者だ
うれしい人だ

そんな人とは心の底から

笑える

そんな人とは心の底を

みんなみせられる

吉田さんの視線は「しんの優しき」を透視しようとしている。「しん」が「真」であるか、「芯」であるか、「深」などであるかは読むものに託されている。その意味では詩行にいかにも「笑顔」や「優しさ」を潜めようと試みるのが吉田さんの詩篇の特徴だろう。人の美点として「しんの優しさ」を見出そうとすることは、吉田さんが誰よりもまつさらにものを直視しようとしているからだ。その人のかくれた優しさを／みつけられる人は／人の心の尊さが／わかる者だ」という人間観を吉田さんは語る。「かくれた優しさ」とは、きつと「心の底」を見詰め、「心の底」に促されて行動する者の美徳なのだろう。

第二章「備前へ」十四篇、第三章「いのち」十一篇の計三十四篇から成り立っている。既刊九冊の詩集のテーマをより深く問い直した詩集だ。吉田さんの詩は、心の驚きをそのまま記述していこうとする衝動を感じる。第一章の九篇は吉田さんの娘さんとお孫さんの素顔を素描しながら、多くのことを考えさせてくれる詩篇なのだ。その中でも詩「わたしの宝物」は私が最も気に入っている作品だ。

わたしの宝物

まつ白い胡蝶蘭の大小の鉢や
シクラメンの色とりどりの鉢があっても
わたしの娘は
小さなお正月用の葉ボタンの
並べられた中において
洗いざらしたエプロンをつけ屈んでいる
じつと 一つ一つビニールの入れ物に植えられた
小さな苗のような葉ボタンをみつめている

新詩集『いのち』は、第一章「たつくと娘」九篇、

花屋さんでも一番すみっこに

自分の居場所をおいて

うつむいている娘よ

お化粧もせず

掃除ばかりして

いつも裏方にまわる

花が好きで

種から育てるのが好きで

職を転々とするうち

花いっぱいの中に自分をおいて

仕事をしてみようと思ったり

他人にだまされたり

書店の人に気の毒だからと

わざと破れた本を選んで買ったり

スーパーに行っても

一番賞味期限のぎりぎりのを買う

お店の人に悪いから と言う

そんなあなたに

神さまはお遣わしになったのでしょうか

高機能自閉症のたっくんを

きつと大切に大切に育てられる

そんなあなただからこそ

貧者の一灯そのものに

小さな小さな明かりを捧げる

影にうづくまるあなた

広い広い宇宙に

いつでも輝く一番星のように

またたく わたしの宝物

吉田さんは世間体や固定した常識にはとらわれていない純粹な心を大切にしている。人間はもちろん、事物の真実を見ようとしていることがよく分かる。人間の美德とは自分の利益をことさら最優先する行動原理ではなく、ハンデのある人びとや地球の他の生きものと共生していこうと、身近なところで心掛けて行動することに価値を置いているのだろう。企業や団体がお祝い事に贈る花として高価な胡蝶蘭がある。この花がずらりと並んで

いるのを見ると私は違和感を感じて、少しもその花を愛でる気がしなくなる。道端にけなげに咲いている野の花の方がよほど美しいと感じている。日本の企業や団体の担当者が花を贈る常識的感覚より、吉田さんの娘さんのように葉ボタンのさりげない色彩を好む人の方が私には健全に感じられる。野の花でも胡蝶蘭でも同じ花であり、胡蝶蘭の方が価値があると感じるなら、多様な自然する花はなの原種の美しさに気づいていないのかも知れない。

この詩「わたしの宝物」を読む度に、私は宮沢賢治の童話「虔十公園林」を思い出す。賢治の問いは、本当の賢さとはなんだろうかという問いであった。馬鹿にされながらも信念を持って木を植え続けた虔十の行為が、後になってみんなの憩いの場所となった。吉田さんの娘さんは、他者の幸せを願って何の見返りもなしに当たり前のように自然に行為している。よほど美しい魂を持ち続けている方だと私には感じられる。その娘さんを「わたしの宝物」と言う吉田さんもまた、そのような心持ちを抱いて生きてこられたのだろう。生きることが大変で人

を顧みない社会の風潮のなかで、とてもさわやかな思いを感じさせてくれる詩篇なのだ。ひどい格差社会になってしまった日本社会を、根底から人間らしい社会に変えていくには、吉田さんの娘さんのような精神性から多くの学ぶべきところがあると思われる。

3

第二章「備前へ」の十四篇は、吉田さんが養女となつて暮らした備前から、生母のいる備前へ帰郷することへの憧れに満ちた詩篇だ。「片上行き」列車に乗ることが母に会える喜びに繋がっていくことを夢みていたのだろう。母の顔に自分の顔を見出すことで吉田さんは自ら何ものであるかを理解していった。第二章の最後の詩「片上行き」には、吉田さんの尽きることのない魂の故郷へと帰っていく懐かしい旅が記されている。

片上行き

ちよつと風が吹いていて

芽ぶいた木々の森の奥に

待っていてくれるでしょうか

わたしを乗せてくれるかしら

物語をひとりごとりに

ぶつぶつと口の中で反芻する

歳老いた女を。

時には幼児のようにだっこされたり

髪を静かに静かにいくども

そおつとなでられたりしながら

座席に乗せてくれませんか

次第に夜が訪れて

小さなあかりの蛍をなん匹もなん匹も

数えきれぬなりに

わたしの姿も踊り手のように

盆踊りの輪のうちにまぜてくれませんか

遠くに聞こえる歌声は

おじさんのひとり歌い。

高く低く

清らかなせせらぎの

さらさらという音を響かせる

あの谷川に

わたしを誘ってくださいませんか

甘い甘い水を飲んだら

身体中がすきとおって

もう見えなくなってしまうかもしれません

汽車のまるいあかりをつけて

もう少し待っていてください

片上行きの

あのガタゴト列車に

足に小さな翼をつけ

きつときつとかけつきますから

吉田さんの身体から魂が抜け出てしまつて片上行きの「銀河鉄道」に乗り込むような情感に満ちた詩だ。六十歳を過ぎた吉田さんは、この片上行きの列車を想像すると六歳の少女に返つてしまふのだろう。そして故郷の祭の盆踊りの輪の中に母に手を引かれながら入っていくのを夢見続けるのだ。そんな魂の故郷は吉田さんが自ら詩

で表現するしかなかった。父母の待つ故郷への感謝と憧れを抱き続ける吉田さんは、人間が生きることににおいて根幹に据えなくてはならないものを指し示しているように思われる。人間が自然から離れすぎて利便性のもとに取り返しのつかない自然を破壊してしまった。しかしこの詩を読むと、破壊された自然や共同体をもう一度再生して、懐かしい人たちとの再会を幻視している。そのため「足に小さな翼をつけ／きつときつとかけつきますから」と吉田さんは真に願っている。吉田さんの詩篇を家族の再会を願う人たちや「しんの優しさ」を探し求める人たちに、また故郷を離れているが故郷を決して忘れることのない人たちに読んで欲しいと願っている。最後に第三章の詩集タイトルの詩「いのち」を引用してこの小論を終えたい。

いのち

木がいます と

タイ語ではいふ

木には命が宿っているからだ という

国の言葉が

生きとし生けるものと

命をもっとも大切にしている源

戦争は人の命を粗末にすること

人間同士が敵対して

殺し合いをする

ことわざにも

「一寸の虫にも五分の魂」とある

一つ一つの生に命の輝きが

あかりを点している

たとえ小さな灯でも

命が消えゆくまで大切に大切に両手で

囲み守ってゆることが

一番大切なこと

花は美しく咲き散ってゆく

命の儂さを嘆くことはない

継がれてゆく

たとえば球根となり実となり種となつて

次世代へと引き継がれる

人の命も亡くなっても

その命を育みその命の輪となつて

生きた者達の心の中で

大事に継がれる思い出となり

来世に生まれ変わる

森の中で

命のささやきが聞こえませんか

逝つたあなたに語りかける声に

答えるこだまが響くように

吉田さんは家族の命を見詰めることによって「生きとし生けるもの」の「命の輪」である「共生」を感じている。そして共に生きることの切実さをさりげなく告げている。また「命の儚さを嘆くことはない」と言い放つ。「いのち」は引き継がれるものであり、「しんの優しさ」は見出されなければならないからだ。吉田さんはこれからもきつと、静かに「いのちの共生」を粘り強く問い続けていくのだろう。